

感性を育む和学講座第34回

～七五三と新嘗祭、亥の子～

七五三

7歳、5歳、3歳になる子供の成長を願う「七五三詣」と言われる年中行事です。天和元年11月15日（1681年12月24日）館林城主の徳川徳松（徳川綱吉の長男）の健康祈願に神様参りをしたのが始まりという説が有力です。

それゆえ、関東が中心に広まりました。

11月は収穫の月であり、実りを神に捧げ感謝をする月です。そして、15日は二十八宿で鬼宿日（きしゅくび）とされ、鬼が家に居るので、嫁とり以外は良い日とされていました。

また、旧暦の15日は満月か満月に近い日ということもあり、11月15日が選ばれたのでしょう。

ただ、「七五三」の原点は平安時代に皇室で行われていた別々の3つの儀式です。

髪置きの儀（かみおきのぎ）・・・3歳になった男の子女の子たちが、それまでは剃っていた髪を伸ばし始める儀式です。昔は病気が髪の毛から入ってくると考えられ、3歳までは坊主頭で育てられていました。男の子、女の子両方が行う儀式でしたが、後に女の子の行事となります。

袴着の儀（はかまぎのぎ）・・・別名は着袴（ちやっこのぎ）ともいいます。5歳になった男児が袴を身に付け、少年の仲間入りをするための儀式でもあります。この儀式も男女ともに行っていましたが、江戸時代に男児のみの儀式となりました。碁盤の上に立ち、左足から袴を履きます。その後、現代でも皇室で行われている碁盤から飛び降りる「深曾木の儀」に続きます。碁盤は天下取りの意味を表しています。

帯解の儀・・・7歳の女の子が着物の付け紐から帯を初めて締めます。この儀式は鎌倉時代に始まり、室町時代には9歳の男女が行っていたとされています。

江戸時代には、「袴着の儀」は5歳の男児が、「帯解の儀」は7歳の女児が行う

という形になっていきます。女兒は「帯解の儀」を経て大人の女性になっていくのです。

このように「七五三」は公家の慣習に武家が憧れ取り入れ、関東を中心にやがて裕福な商人にも広まっていきます。

関西でも行うようになったのは戦後かもしれません。京都では十三詣りがあり（数えて十三歳の時に知恵を授けもらうために虚空蔵菩薩へ祈願する）、そちらの方が広まっていたのです。

7歳までは「神の子」と云われ、昔は幼い時に命を落とす子供が多く（神様が手元に子呼び寄せたと考えられた）、7歳になると一人前の人間として認められました。



わらべ歌の「通りゃんせ」は不思議な歌です。

「通りゃんせ 通りゃんせ
ここはどここの細道じゃ
天神様の細道じゃ
ちょっと通してくりゃしゃんせ
御用のない者通しやせぬ

このこの七つのお祝いに お礼を納めにまいります
行きはよいよい 帰りはこわい こわいながらも 通リゃんせ 通リゃんせ」

この歌詞の不思議さが、いろいろな説を生み出しています。

七歳までは神の子と言われてきました。昔は幼い子供が大人になるまで成長できるのは難しかったのです。身体が安定する 7 歳まで無事成長できたお礼を神様に伝えに行くので、行きはよいよい。

帰るときは、もう神の子ではなく人間の子になります。神のご加護がなく、人間の子として世の中で成長としていくには、様々な困難や苦勞が待ち受けています。そう、人間社会の中で「こわい」事にも遭遇するから「帰りは怖い」という説。でも、「こわいながらも通リゃんせ」は、それでも「生きていこう」と唄っている、いわば応援歌。

わらべ歌「通リゃんせ」が「七五三」の行事と関連があるのかどうかは不明です。それでも、長い年月をかけて子供たちに伝わってきました。単に「怖い」だけの歌ならどこかで消えていると思うのです。何世代にも伝わり続けているのは、「七五三」と同じ、歌には子供たちの健やかな成長を願う想いが込められているのではないのでしょうか。

新嘗祭と亥の子餅

神嘗祭の約1か月後には、天皇陛下が新穀を召し上がる「**新嘗祭**」が行われます。新嘗祭は宮中をはじめ、全国各地の神社で執り行われている宮中祭祀であり、宮中祭祀の中でも最も重要とされています。

新嘗祭の主な儀式には前日に天皇陛下の**魂の活力を強化**する鎮魂祭、当日神々や天皇の御霊が祀られている宮中三殿で新嘗祭を執り行う奉告(神、貴人に知らせることを行う新嘗祭賢所・皇霊殿・神殿の儀、そして夜には新穀を神々に献上し、天皇陛下自らも神前にお供えした同じものを召し上がる神嘉殿の儀があります。

太陽の光を受けて成長した稲穂には、太陽神である**天照大神の靈威**が宿っており、瓊瓊杵尊の子孫である天皇陛下が大嘗祭(天皇陛下が即位後初めて行う新嘗祭)において、新穀を召し上がることで、天照大神の靈威を身に付け、それを毎年の新嘗祭で更新することが新嘗祭の意義でもあります。



古事記における、穀物を含む食物と神様の関係性を考えてみましょう。伊弉諾命と伊邪那美命は穀物の神様、大宜都比売神(オオゲツヒメノカミ)を誕生させました。

須佐之男命が、大宜都比売神に神々にお供えする食べ物を求めました。大宜都比売神はご自身の、鼻、口、尻から美味しそうな料理を出しました。

須佐之男命は大宜都比売神が故意に食べ物を穢したと思い、大宜都比売神を殺してしまいます。すると、亡くなった大宜都比売神の体から、穀物などが生りました。頭からは蚕、目からは稲、耳からは粟、鼻からは小豆、陰部からは麦、尻からは大豆。神産日巢神(カミムスヒノカミ)がそれらを拾い上げさせ、種として地上に授けます。これが、五穀の起源です。

そして、この逸話は「**生物の循環**」を表しているといわれています。排泄物から料理を作っていた神の屍から五穀が生ったということは、排泄物は大自然に還り、また食物が生る。排泄物も資源ということになります。



亥の子餅

11月になると、和菓子屋さん「亥の子餅」が見られます。

古代中国では旧暦10月亥の日に穀類（小豆など）を混ぜ込んだ餅を食べる風習があり、やがて日本に伝わり、宮中行事に取り入れられたといわれています。

また、応神天皇は皇太子時代に猪に危難を救われたことを思い出し、毎年10月の亥の日に、能勢の村に供御を行うように命じたことが起源とも云われています。亥の子餅は別名能勢餅とも言います。



亥の子餅の他に、「亥の子突き」があります。

亥の日の夕刻から朝にかけて子供たちが、「亥の子石（大きな石を縄で繫いだもの）」の縄を持ち、上下させて地面を打ち、歌を歌いながら一軒ずつ巡ります。

地面を打つのは、田の神様を山に帰すため。または、田んぼの神様は山にお帰りになり、空いた状態の地に悪い神様が入らないようにするため、など云われています。農作物に害を与えるモグラやネズミなどを追い払う目的もあるようです。



江戸時代には、亥の子の日に炬燵（こたつ）や火鉢を出して使い始めていました。

イノシシは、摩利支天（仏教の守護神・炎の神）の使いと云われ、火を免れるから火災が起こらない。さらに、陰陽五行思想では、亥は陰に当てはまり水の運気を持つことから、火を抑えると考えられていました。